開南大学集中講義 「日本語学概説」川口裕司（東京外国語大学） 2018.3.17

第3回 日本語の変異(Variation)：言語地理学と社会言語学

講義の流れ

地理的変異 1. 方言研究の歴史： フランスと日本　　2. 方言区画論： 東条操、東西対立

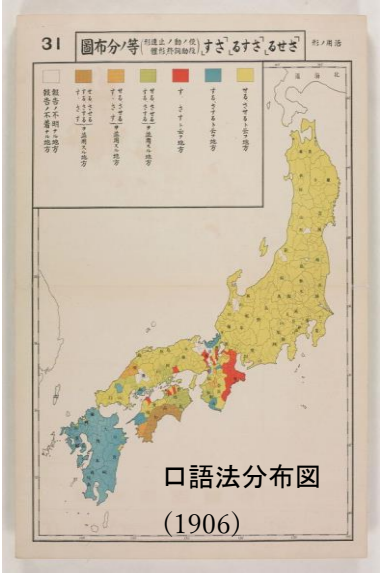
3. 言語地理学： 周圏分布、　　4. 日本言語地図(LAJ)、方言文法全国地図(GAJ)

5. 新日本言語地図(NLJ)： 方言の進化（LAJ/GAJ vs NLJ）

社会的変異 6. 社会言語学:

時間的変異 7. 歴史社会言語学:

実習 8. 言語地図の解釈　　9. 方言の記述



日本の方言研究

1903 「音韻、口語法取調ニ関スル事項」

国語調査委員会が中心となった全国的通信調査

1905 「音韻調査報告書」、1907 「口語法調査報告書」

1928 東京方言学会

柳田國男、東条操、上田萬年、橋本進吉、金田一京助他

1928 ドーザ、「方言学その理論と実践」、

小林英夫が『民族』3.3 で紹介

1930 柳田國男、『蝸牛考』、刀江書院

1938 ドーザ、『言語地理学』、松原秀治訳、冨山房

1931-38 雑誌『方言』

1940 日本方言学会設立、各地の方言学会が結集

1944 国語学会設立、日本方言学会は吸収される

1948 国立国語研究所（現 NINJAL)の設置

1957-64 全国方言臨地調査

1966-74 『日本言語地図』(LAJ) 全6巻 300 枚

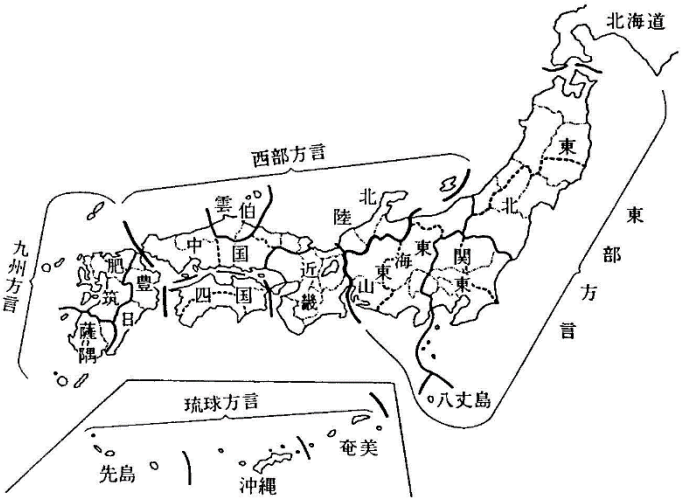
1979-82 全国方言文法臨地調査

1989-2006『方言文法全国地図』

全6巻 350 枚

2010-15 全国方言臨地調査

2016『新日本言語地図』(NLJ)、大西拓一郎編、150 枚



日本の方言区画 大西 (2008) p.11.

東条操の区画論を加藤(1977)が整理したもの

3. 言語地理学

翻訳 ガミルシェーク、E. (1935) 「言語地理学」、江実訳、国語科学講座

ドーザ、A. (1938)『言語地理学』、松原秀治訳、冨山房

コセリウ、E. (1981)『言語地理学入門』、柴田武, W.グローターース共訳、三修社

研究 柴田武 1969『言語地理学の方法』筑摩書房

W.A.グローターース 1976『日本の方言地理学のために』、平凡社

馬瀬良雄 1992『言語地理学研究』、桜楓社

開南大学集中講義 「日本語学概説」川口裕司（東京外国語大学） 2018.3.17

言語地理学の原理

周圏分布：

ABA分布。中心Bが革新形、周辺Aが古形

A（古形）	B（革新形）	A（古形）

・同音衝突

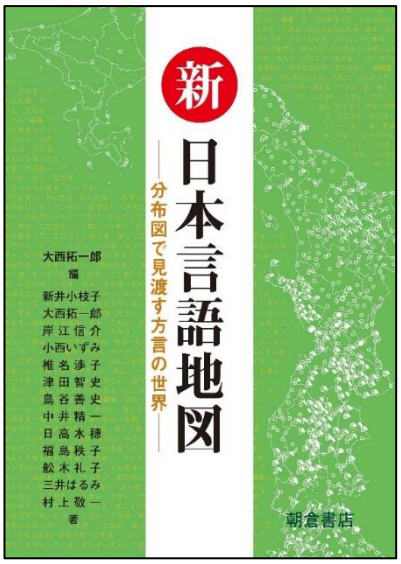
変化等で同音になること。混乱するため置き換えが起きる

・類音牽引

意味の異なる類似の語形に引かれて語形変化する

・民間語源

言語学的証拠がなく、人々が信じている語源



4. 日本言語地図(LAJ)

分布1： 東西対立型、 分布2： 無変異型、 分布3： 周圏型、

分布4： 周圏分布の矛盾、 分布5： 側面型、 分布6： 残存型

グロットグラム

5. 新日本言語地図(NLJ)

1966-74 『日本言語地図』(LAJ)、臨地調査 1957-64

1989-2006『方言文法全国地図』(GAJ)、臨地調査 1979-82

2016 『新日本言語地図』(NLJ)、臨地調査 2010-15

調査項目 211 のうち、149 項目のみを地図にした

LAJと GAJ から 40～50 年

6. 社会言語学

アントワーヌ メイエ (1866-1936)

・言語活動は著しい社会的事実である。(・・・) 1つの言語は、それを話す各個人から独立して存在する。言語がこうした諸個人の総和の外部にいかなる実在性を持たないとしても、言語はその普遍性ゆえに個人の外部にある。

・個人に対する外在性および強制的性格によって、デュルケームは社会的事実を定義したが、こうした性格は、それゆえ言語活動においてじつに明白に現われる。

Antoine Meillet, *Linguistique historique et linguistique générale*, Klincksieck, 1921.

社会言語学の課題

1. 本来的には恣意的な存在である言語上の差異が、何ゆえに社会的価値を付与されるのかという問題の解明

2. 人々が口では標準語のみが「正しい」ものであると認めながらも、依然として非標準語を使い続けるのは何ゆえかを解明する （ジェームズ・ミルロイ、レスリー・ミルロイ, *Authority in language*, Routledge, 1985.）

「を」 or 「が」？

今日、多少とも規範意識をもった文典においては、「水を飲みたい」のように「を」用いるのは正しい言い方ではなく、かような場合には「水が飲みたい」のように「が」を用いるのが正しいと説いているのが普通である。しかしまた、今日において、何故に「水が飲みたい」という言い方が正しく、「水を飲みたい」という言い方が正しくないのか、その根拠については、必ずしもはっきりと、これを説いているものはないようである。(...) (松村 1998: 240)

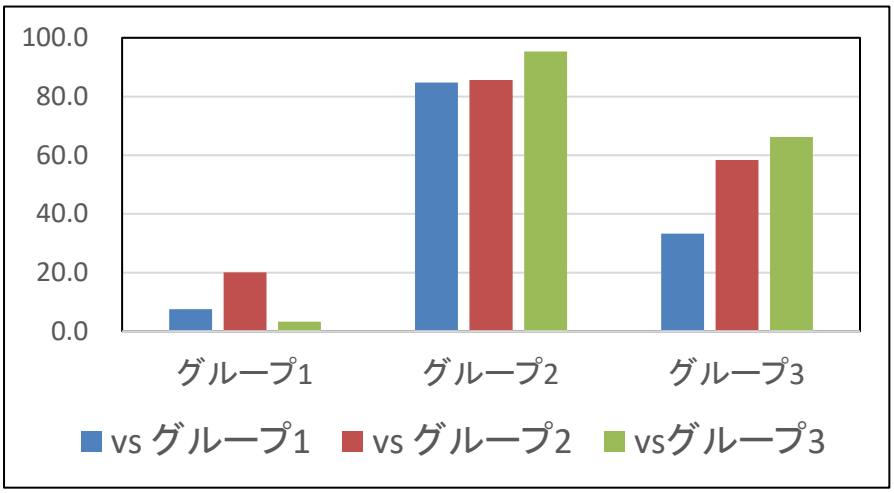
国立国語研究所の調査(1955)
児童生徒言語調査 (1970)
『平成 17 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』、
文化庁、2005.

平均出現数					
	男性	女性	t	df	p
-ぬ	1.8	0.434	2.72	96	0.008 < 0.05 (S)
-ない	0.1	0.113	-0.7	96	0.481
-ねぇ	3.8	3.585	0.19	96	0.849
-あい	11	10.77	-0	96	0.963
-ええ	9.4	6.849	1.02	96	0.311

5. 歴史社会言語学
『浮世風呂』式亭三馬 (1809-13)
否定形「ぬ」「ない」「ねえ」
見-ぬ / 見-ない/見-ねえ、あぶ-ない/あぶ-ねえ、小-さい/小-せえ
登場人物： 45 人の男性、 53 人の女性 中沢 (2006)

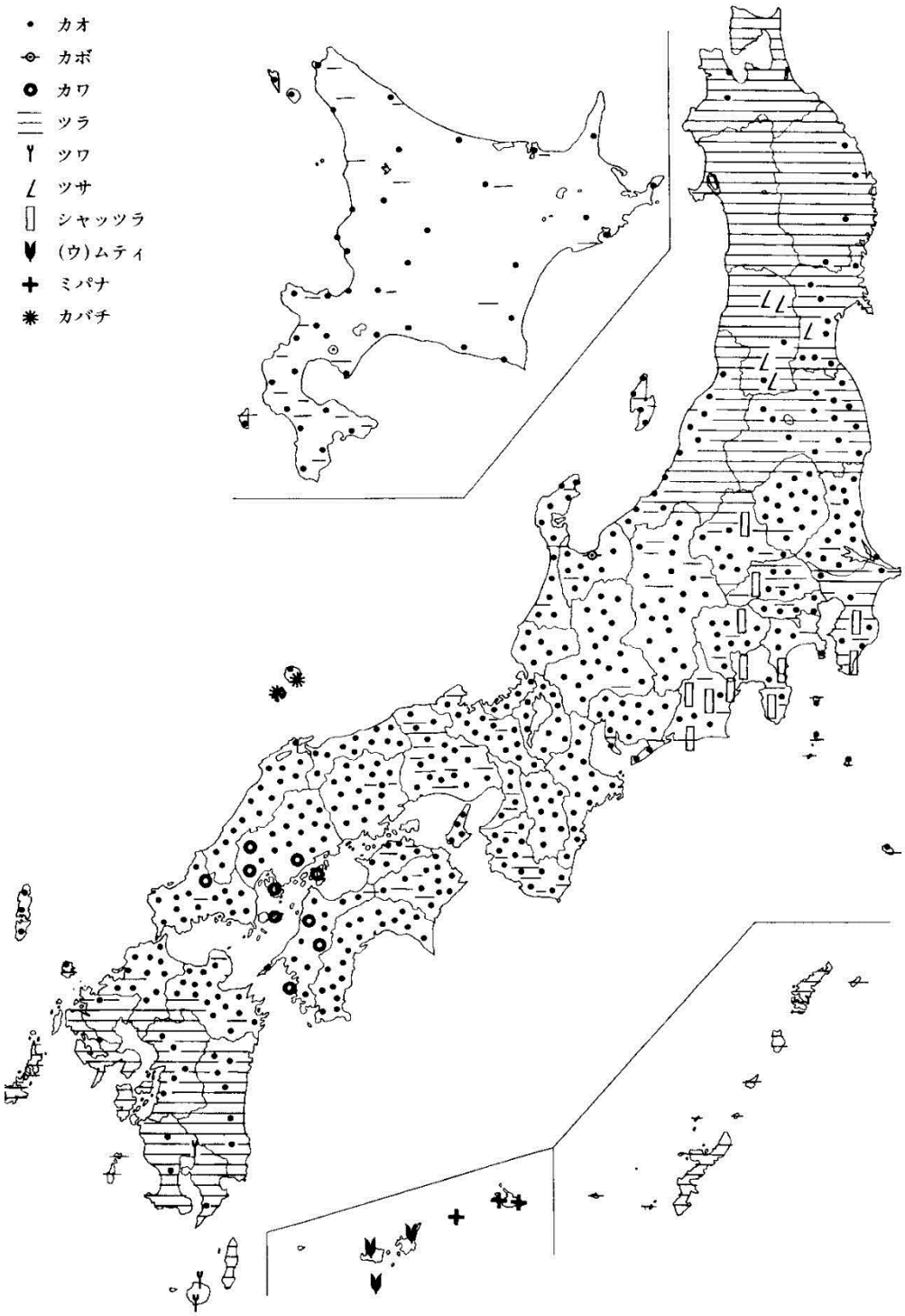
変異の社会言語学的分析

	男性	女性	社会階層	変異形
グループ 1	七十ばかりの隠居 医者たくあん 俳諧亭歌詠 鬼角（師匠） 生酔（侍）	おやす、おなつ （商人の娘）	高い ↑	–ぬ, -あい が優勢
グループ 2	むだ助、飛八（侠客） 番頭	お囲、おさみ （芸者）	↓	-ねぇ, –あい 優勢
グループ 3	湯汲み いさみ、鉄砲作（侠客）	お丸（下女） お舌、お鳶 （遊女） お鯛（給仕）	低い	-ねぇ, –ええ 優勢



グループ 1 では「-ええ」の使用が非常に低い
グループ 2 では「-ええ」の使用が頻繁
グループ 3 ではコードスイッチングが起きている

8. 言語地図の解釈（実習） 以下の文献資料を見ながら、地図における方言形の分布について考えてみましょう。



おもて

紅の**おもて**の上に何処ゆか皺が来たりし『万葉集』5.804、8 世紀後 「赤い顔の上にどこからか皺が出てきた」

おもてさへ赤みてぞ、思ひ乱るるや『枕草子』10 世紀末-11 世紀「顔まで赤くなって、途方にくれることだ」

かほ

女の**かほ**の下簾よりほのかに見えければ（『伊勢物語』99、10 世紀前)「女性の顔が下簾からわずかに見えたとき」

面、**顔**をつらとなづく、如何『名語記』4、1275「おもて、かおをつらと呼ぶが、どうであろう」

かほなどをのぼふべきやと思ほゆ『名語記』4、1275 「顔などをぬぐうべきかと思われる」

つら

頬（つら）をつきて嘆けども『東大寺諷誦文平安初期点』830 頃「頬をついて嘆くが」

つらいと赤うふくらかなる『能因本枕』62、10 世紀末 「頬がたいそう赤くふっくらした」

かの翁が**つら**にある瘤をや取るべき 『宇治拾遺』1.3、13 世紀前半 「あの翁の頬（ほお）にある瘤を取ろうか」

人ニ**ツラ**ノ皮ノアツウテツラブキ者アリ『玉塵抄』7、1563-93「ツラの皮が厚く、不満な者がいた」

つらは鹿のつらのごとくなり『信長公記』首、1568-82「顔は鹿の顔のようになり」

随分**面（ツラ）**の皮厚うして人中を恐れず『好色一代女』5、1686 「たいそうツラの皮が厚く、人の中を怖がらず」

八百八長に**顔（ツラ）**をさらし『武道張合大鑑』2.1、1709「市中いたるところで顔を人目にさらし」

9. 方言記述（実習）

以下の単語を参考にしながら、次の方言を聞いて、発音記号を使って記述して、意味を考えてみましょう。

[agane:iɴ] 拾い集める、[jama] 山、[ka:] 川

[-itaɴ] ～していた、[(i)meɴɕe:ɴ] いる（尊敬語）、

[ɴme:] おばあさん、[tamuɴ] たきぎ、

[taɴme:] おじいさん、[itɕa:ɴ] 行って来る、

[tɕiɴtɕuruka:] 着物、[tukuru] ところ

参考文献

大西拓一郎、『現代方言の世界』、シリーズ現代日本語の世界6、佐藤武義（監修）、朝倉書店、2008

大西拓一郎（編）、『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界』、朝倉書店、2016

『昭和 30 年度 国立国語研究所年報 7』、国立国語研究所、1957

小林隆、「＜顔＞の語史」、『国語学』 132、51-64、1983

小林隆、篠崎幸一編、『ガイドブック方言研究』、ひつじ書房、2003

佐藤亮一（監修）、『お国ことばを知る 方言の地図帳 【新版】方言の読本』、小学館、2002

真田信治、渋谷勝己他、『社会言語学』、おうふう、1992

真田信治、ダニエル・ロング他、『改訂版 社会言語学図集—日本語・中国語・英語解説—』、秋山書店、2010

神保五弥校注、『浮世風呂』、式亭三馬、角川文庫、1968

田中 ゆかり、林 直樹、前田 忠彦、相澤 正夫、「1 万人調査からみた最新の方言・共通語意識 ：「2015 年全国方言意識 Web 調査」の報告」、『国立国語研究所論集』 11、2016、117-145.

土屋信一、『江戸・東京語研究—共通語への道』、勉誠出版、2009

東条操、「方言研究の歩み」、『国語学』35、1958、91-104

中沢 紀子,「江戸語にみられる否定助動詞ヌとネエの対立」,『日本語の研究』 第 2 巻 2 号, 2006, 93-107

中田敏夫,「『浮世風呂』にみる場面変容にともなうことばのきりかえ—連母音 ai の融合非融合を資料に—」,『人文学報』, No.173, 1985, pp.25-47.

福島 直恭、『「あぶない」が「あぶねえ」にかわる時－日本語の変化の過程と定着－』、笠間書院、2002.

前田桂子,「江戸噺本における否定の助動詞「ヌ」と「ナイ」の分布について」,『熊本大学 国語国文学研究』, 26, 1990, 71-88 1990.

松村明,「江戸語における連母音の音なまり」, お茶の水女子大学人文科学紀要, 第7巻, 1955,『江戸語東京語の研究』, p.206-238 に採録, 1957, 東京堂.

松村明、『近代の国語—江戸から現代へ—』、桜楓社、1977.

Kawaguchi Yuji, Fumio Inoue, “Japanese Dialectology in historical perspectives : Part I. The Linguistic Atlas of Japan – A Typological Viewpoint-”, *Revue belge de philologie et d’histoire*, 80, 2003, 801-829

Kawaguchi Yuji, «Peut-on étudier la langue parlée dans les documents écrits ? Témoignages du françaiset du japonais », *Penser les langues avec Claire Blanche-Benveniste*, Sandrine Caddéo, Marie-Noëlle Roubaud, Magali Rouquier et Frédéric Sabio (dir). Presses Universitaires de Provence, 2012, 235-247